

異世界 子育てしながら冒険者します

ゆるり紀行

10

Minazuki Shizuru
水無月静琉

ベクトル

タクミの契約獣となった
スカーレットキングレオ。
小型にもなれる。

ボルト

タクミの契約獣となった
サンダーホーク。

マイル

タクミの契約獣となった
フォレストラット。

アレン

水神の子で、妹・エレナと
ともにタクミに保護された
少年。格闘術が得意。

レベッカ

タクミ達が
お世話になっている、
ルーウェン家当主夫人。

タクミ・カヤノ

異世界に風神の眷属として
転生した本作の主人公。
アレンとエレナの保護者。

ジュール

タクミの契約獣となった
フェンリル。
小型にもなれる。

フイト

タクミの契約獣となった
飛天虎。小型にもなれる。

エレナ

水神の子で、タクミに
保護された少女。
格闘術が得意。

登場
CHARACTER
人物

第一章 ルイビアの街へ行く。前編

僕は茅野巧^{かやのたくみ}。エーテルディアという世界に転生した元日本人。

僕が転生したのは、この世界の神様の一人である風神シルフィリール——シルがうっかり起こした不慮^{ふりよ}の事故が原因だ。

そして、責任を感じたシルが転生させてくれたのだが、何故か僕はシルの眷属^{けんぞく}になったようで、ステータスに表示される種族が【人族？】と……人間も辞めてしまったらしい。

まあ、眷属としてやるべきことは特にないようなので、普通に冒険者となって生活をしている。……いや、最初に降り立ったのがガヤの森という危険な場所であったことと、そこでアレンとエレンという双子、それも水神様の子供を保護したのだから普通ではないかな？

そのアレンとエレンだが、水神様からの連絡が何もないため、今も僕の弟妹^{きょうまい}として一緒に生活している。早いものでもう一年とちょっとが経つんだよね。

基本的にガディア国で生活している僕達だが、今は先日作った即席スーブの販売契約のために、ガディア国の王太子^{おうたらし}、オースティン様と共にクレタ国に来ていた。

そこでレイン様とクラウド様というクレタ国の双子王子と出会って交流を深めていたのだが……
残念ながら僕達は本日、ガデア国に帰国するのだ。

「忘れ物はないな？」

「なーいー」

僕の言葉に、子供達は元氣よく挙手して答える。

契約についての話し合いが終わってから、三日間の自由行動の時間を貰った僕達は、迷宮に行つて大いに楽しみ、昨晚のクレタ国滞在最後の晩餐ではレイン様やクラウド様とたくさん話をした。

食事で出したお子様プレートに載っていたハンバーグをはじめとした料理や、カレーなどいくつかの料理のレシピは忘れずに譲渡したし……やり忘れもないはずだ。

「ギヤウ」

「グルツ」

レイン様とクラウド様に見送られ、僕とアレン、エレナ、それからオースティン様達ガデア国の面々は、ここまで乗せてきてくれた飛竜——シャロ達の背に乗ろうとしたのだが、そこで問題が起こった。

シャロ達五匹の飛竜とクレタ国で飼われているグリフォンが、睨み合いを始めてしまったのだ。

「タクミ達を連れて帰ろうとするのを嫌がつているみたいだな」

「グリフォンが非常に懐いたという報告は聞いていましたが、これほどまでとは思っていませんで

した」

クラウド様は若干呆れたような表情、レイン様は少し驚いた表情をしていた。

「タクミ、宥めてきてください」

オースティン様は悟りを開いたような表情で、軽く無茶振りをしてくる。

「ちなみに、どちらを？」

「もちろん両方ですよ」

僕の疑問に、オースティン様は笑顔で言い切る。

「あそこに行け、と？」

「ええ。大丈夫、タクミなら何とかなりますよ」

今にも取っ組み合いを始めそうなほど睨み合っている、シャロとグリフォンのトップらしき個体そこに割り込んで来いって……。

「まだ距離は保っていますが、時間の問題って感じなんですけど？」

「だからですよ。飛竜とグリフォンが本格的に争い始めたら被害が増大してしまいます。私は城が壊れるのも死傷者が出るのも避けたいですからね」

「……」

ないと言いつれない状況に、僕は言葉を詰まらせてしまう。

飛竜とグリフォンが戦い出したら、城どころか街にも被害が出そうである。

「……わかりました」

僕は諦めて、シャロ達を宥めに行くことにした。

連れて帰ろうとするシャロと、別れたくないグリフォン。つまりは僕達が原因らしいからな。

「けんかはー」

「だめなのー」

「めっー」

どうやって宥めようかな……と考えていると、僕と一緒にシャロ達の傍まで来たアレンとエレナが、両手を腰に当てて説教を始める。とても可愛い説教だ。

「……ギヤウ」

「……グルッ」

だが、効果は観面。先ほどまで一触即発の雰囲気だったのに、シャロ達は大人しくなるどころか……しょんぼりしている様子である。

「おにーちゃん、これでいいー？」

アレンとエレナはシャロ達が大人しくなったのを確認すると、僕のほうを振り返って——こてんつと首を傾げる。

「あ、うん、完璧！」

「やったー♪」

僕は思わず拍手を送る。

誰がこれほどすんなりと事が収まると思っただろうか。どうなることかと固唾を呑んで見守っていた人達も、啞然としていないか。

「よしよし」

「なかよく」

「しようねー」

「ギヤウ、ギヤウ」

「グルッ、グルッ」

アレンとエレナは、周りがそんなことになっているとは露知らず、甘えるような鳴き声を出しながらすり寄ってくるシャロ達を撫でている。

緊張していた空気が一気に緩み、和やかな雰囲気である。まあ、それは子供達だけで、周りはまだまだ混乱中だ。

「落ち着いたな？」

僕も子供達の傍に行き、まずはシャロを撫で、続いてグリフォンを撫でつつ声を掛ける。

「ごめんな。僕達はずっとここにいるわけにはいかないんだ」

「……グルッ」

グリフォンは賢いので僕の言葉をしっかりと理解して、少し落ち込んだ様子を見せる。

「グルッ、グルル」

「ん？」

「あれ〜？」

「突然どうしたんだろう？ あつちは……獣舎があるほうか？」

東の間落ち込んだグリフォンだったが、突然何かを思い出したように、獣舎のほうへ飛んで行ってしまった。

「えつと……オースティン様、もう少し待ってもらえますか？ それか僕達を置いて先に行つていただいても構いませんよ」

あまり時間が掛かるようであればオースティン様に迷惑を掛けてしまふと思ひ、僕達は自力で帰るといふ選択肢を提示する。

「大丈夫です。私もグリフォンのあの行動が気になりますから、待ちますよ」

しかし、オースティン様もグリフォンの様子が気になったのか、待つてくれるようだった。

「かえつてきたー」

「お、本当だな」

しばらく待つと、グリフォンが飛んでくるのが見えた。

「グルッ」

グリフォンは僕の前まで飛んで来ると、前足で掴んでいた白に茶色のまだら模様がある球体っぽ

いものをおもむろに差し出して来る。僕が咄嗟に両手を伸ばすと、グリフォンはそれをあつさり僕の手の上に載せた。

「たま〜」

「はあ!? た、卵!? え、ちよつと待つて！ もしかしなくても君の子供だったりするのかな!？」

「グルッ」

僕の頭くらいの大きさはある卵で、それはほんのり温かく、先ほどまで温められていた様子である。

「何で僕に渡したの!？」

グリフォンは地面に着地すると、頭でさらに卵を押しつけてくる。

ただ、卵も撫でてくれというような雰囲気ではない。

「つれてつてこのーっ」

「グルッ！」

アレンとエレナの無邪気な言葉に、グリフォンが返事をする。

「いや、本当にちよつと待つてどうか。アレンとエレナもそんなに簡単に言わないの！ グリフォンも返事をしないの！」

グリフォンはクレタ国に所属している。その卵を勝手に持つて行くわけにはいかないだろう。いくら親グリフォンが良いと言つてもね。



「レイン様、クラウド様、グリフォンを止めてください。これはどう見ても駄目なやつですよね!」

僕はとりあえず、グリフオンのことに関して判断できる飼い主? 保護者? 上司? 何でも良いが、クレタ国の人であるレイン様とクラウド様に話を振ってみた。

「……どうなのでしょう?」

「いや……これは駄目だなんて言えないだろうか?」

はつきりと駄目だと言つて欲しかったが、曖昧な答えしか返つてこなかった。

「オースティン様も何か言つてくださいよ!」

「……いや、想定外過ぎて口を出せませんでした。タクミ、随分と凄い贈りものをいただきましたね」

「まだ貰っていないですからね!」

オースティン様にも助けを求めてみたが、助けてくれる様子はない。それどころか、達観した様子である。

「え、これは本当にどうしたら……」

本当にどうしたらいいのかからずにいると、レイン様から声を掛けられる。

「タクミ殿、今、父を呼びに行かせましたので、少々お待ちいただけますか」

「……はい、ありがとうございます」

この出来事はレイン様やクラウド様でも判断が難しかったようで、急遽、クレタ国王のメイナード様に判断を仰ぐために人を走らせてくれたら良かった。

「グリフォンが卵を渡したって？」

しばらくすると、メイナード様が愉快そうな表情でやって来た。

「今、思い止まるように説得しているところです」

「何だ、タクミ、受け取らないのか？ タクミなら構わんぞ？」

「そこはメイナード様が駄目だと反対するところでしょ？」

メイナード様はあっけらかんと、グリフォンの卵を持って帰ることを許可してくれる。

一応、グリフォンって、自国の戦力だね？ それを国に所属しない者に簡単に託しちゃ駄目でしよう！

「少しは構ってください!!」

「構わん！」

「いやいやいや！ というか、僕はグリフォンの卵を孵すことも、グリフォンの子供を育てることも自信がありませんからね！」

「それでも魔物なんだから、多少手荒に扱ったとしても、ちょっとやそつとでは弱ったりしないだろう？」

まあ、魔物は生命力が強いので、普通の鳥より……鳥とは言い難い生きものだが、その雛を育てるよりは繊細さは必要ないかもしれない。だが、それでも卵を孵すのがどれだけ大変かは未知数である。

「それに子供を親から離すことはしたくありません！」

「その親が渡そうとしているのだろう？」

「そうですね！」

本当に何でかな!? 何で、子供を手放そうとするかな!?

「鳥には托卵する種もいますから、それですかね？」

「グリフォンが托卵する種かどうかはわからないけどな。というか、グリフォンは鳥の括りではないのか？」

メイナード様 came ことで何かを判断したりしなくて良くなったレイン様とクラウド様が、のんびりと現状を分析し始める。

「ギヤウ」

「ん？ どうしたんだ、シャロ」

「ギヤウ、ギヤウ」

すると、今まで大人しくしていたシャロが、突然何かを訴えるかのようになり鳴き出した。

「あゝ、これはシャロもタクミに子供を託したいと言っているのではないですか？」

「ギャウ！」

「おや、合っていましたか」

「いやいやいや、何で平然と訳しているんですか!？」

オースティン様がシャロの気持ちを抱きかかっているが、ちよつとは慌てて欲しい。自国の大切な存在である飛竜が、子供を他人に渡そうとするのは大問題だよな？

「残念ながら、今はうちに飛竜の卵はありませんし、飛竜の幼体もいません」

「ん？ じゃあ、ただのシャロの希望ってことですか？」

「そうですね」

「……ギャウ」

オースティン様の言葉に、シャロががっくりと項垂れる。

そんなシャロを、アレンとエレナが慰めるように撫でていた。

「現状は無理ですが、今後、卵が生まれた場合、タクミに託そうと騒ぎそうですね」

「ギャウ！」

上手く回避できたと思ったが、まだ完全に回避できていなかったようで、オースティン様の言葉にシャロが元氣を取り戻す。

まあ、飛竜については先延ばしにして、とりあえず今は――

「子供は手元で育てなさい」

グリフォンのほうをどうかしなくてはならないので、僕はそちらに向き直って説得を再開した。

「グルッ」

しかし、グリフォンは嫌だという風に首を横に振る。

「この子で繋ぎ止めなくても、また会いに来るから」

「グルッ？」

僕の言葉に、グリフォンは「本当か？」とでも言いたげに首を傾げる。

「もちろん」

「「あごにくるー」」

アレンとエレナも僕を後押ししてくれる。

卵を渡された時は連れて行く気満々だった子供達も、僕が親から離れたくないと言ったところではっとした様子だったので、僕の意見に賛同してくれたらしい。

アレンとエレナも親を知らないからな。何か思うところがあったのだろう。

「子供の意思も大事だよ。僕達と一緒に行く行かないは、この子が生まれて大きくなってから自分で決めさせてもいいじゃないか」

「……グルッ」

何とかグリフォンは納得してくれたようだ。渋々だが、僕が差し出す卵を受け取る。

「ふむ。では、その子はある程度成長するまでこちらで面倒を見ればいいのだな」

「え？ いや、だから、それはまだ決まっていますからね!」

「子グリフォンがタクミ達に懐くのはまず間違いない。そこで一緒に行ける選択肢があるのなら、そうなるのは絶対だろう?」

「……」

メイナード様の言葉に、僕はしばらく硬直した。

あれ? 回避できたと思っただが、これは駄目だった感じなのかな?

すると、子グリフォンが育つまでクレタ国に面倒を押しつけた感じになるのか? ……それはそれでまずいよな?

え? じゃあ、やっぱり卵を引き取ったほうがいいのか? いや、でも、卵を抱えたままでの冒険者稼業はつらい。でも、だからといって卵とは契約できないから、ジュール達みたいに影に控えさせることもできないし……。

「そ、そこはクレタ国に留まるように、可愛がって育てれば……」

「無理だな」

僕の苦し紛れの提案を、メイナード様は即座に否定する。

「……そんな即答しなくても」

「間違はなく無理だ。賭けてもいい、その卵のグリフォンは、育ったら間違はなくお前のもとに行く」

メイナード様が力強く断言する。

そろそろ現実を見ないと駄目か。そうすると、どうするかな。

「だがまあ、いち冒険者であるタクミが卵を抱えて歩いていけば、厄介者から狙われるのは間違いないだろうからな。戦力になるまで城で育てるということは賛成だ」

メイナード様の言葉に、やはり卵を引き取ったほうがいいかな? という思いを慌てて引っ込める。

うん、やっぱり卵を持ち歩くのは危険だから、絶対に無理だな!

「クレタ国として、後々、他人に渡るかもしれないグリフォンを育てることはいいんですか?」

「なに、一匹くらい構わんさ。そのぐらいで国力が覆るような政治はやってないつもりだ。それとも、何だ? タクミはうちの国を襲う予定でもあるのか?」

「ないですよ!」

前半はほとんど構える王様っぽかったのに、後半が駄目! 何てこと言うかなっ!!

それは冗談でも言っちゃ駄目なやつ!

「なら、問題はないな。——レイン、手配と周知は任せるぞ」

「わかりました」

「じゃあな、タクミ、またいつでも遊びに来いよ」

用事は終わったばかりに、メイナード様はあっさりと城に戻っていった。

「……本当にこれでいいのかな？」

「父上が良いと言っただけですから、良いんですよ。では、タクミ殿、卵はしっかりと預かりますね」
「とりあえず、生まれたら連絡するから、タクミもどこに居るかくらいに連絡はこっちにも寄越せよ」

メイナード様に続き、レイン様とクラウド様もあっさりと言った。

そうなっていると、細々と気にしているほうが馬鹿らしくなってきた。

「うまれるの」

「たのしみー」

「うん、そうだな」

ここはアレンとエレナみたいに、子グリフォンが生まれるのを純粋に楽しみにしておこう。

「では、我が国でも飛竜が生まれたら、タクミのもとに送れるように立派に育てないといけませんね」

「ギヤウ」

「オースティン様もシャロも……子供を洗脳するのは良くないですよ」

小さい頃から変なことを刷り込みそうな気がするの……気のせいであって欲しい。

というかオースティン様、シャロと普通に会話していないか？

「洗脳だなんて人聞きが悪いですね。私はそんなことをする技術は持ち合わせていませんよ」

「……」

そんなこと言っても、オースティン様ならできそうな気がするんだよね。

「タクミ、どうして疑うような目で見るんですか。酷いですよ」

「……お待ちせずみませんでした。さあ、帰りましょうか」

「……あからさまに話を逸らしましたね」

はい、逸らしました。

とはいっても、出発が遅れているのも確かなんだよね。見送りに来た人達をずっと拘束しているわけにはいかないしさ。

「ふふふっ、タクミの期待に堪えて、立派な飛竜の子を育ててみせましょう。——シャロ、子作りを頑張ってくださいね。そして、有能な子供をタクミ達のもとへ送りましょう」

「ギヤウ」

「良い返事です」

……あ、あれ？ オースティン様に火がついちゃったかな？ シャロと本格的にタッグを組んじゃったよ!? これ、やつちやったかな？

「それでは帰りましょう。——レイン殿、クラウド殿、この度はありがとうございました。今度は我が国にもいらしてくださいね」

「機会があれば是非に」

「道中お気をつけてお帰りください」

しかも、オースティン様はクレタ国の面々に挨拶すると、そのまま大きく移動して飛竜に乗ってしまっている。

「……オースティン様？」

「何ですか、タクミ？ それよりも、出発しますから早くシャロに乗ってください」

「……はい。アレン、エレナ、行くよー」

「はーん」

オースティン様の機嫌を損ねちゃったのかな？ それとも、怒っている？

素っ気ないオースティン様の態度に少々へこみつ、最後にもう一度レイン様とクラウド様に挨拶をしてから、僕達はシャロに乗り込む。

それからというもの、僕はちよつと気まずい思いを抱えたまま空の旅をつづけた。

「ふふっ」

そうしてしばらく進んでいたのだが、休憩で地上に降りた時、オースティン様は耐えきれなくなつたように笑い出した。

「そんなに不安そうな顔をしながらちらちらとこちらを見ないでください」

「……オースティン様？」

「タクミが意地悪をするので意地悪で返してみたのですが、思ったよりも効き目があったようで

すね」

「……凄い効き目でしたね」

本当に凄い効き目だった。正直、こたえた。

僕って、実はオースティン様に結構気を許していたんだな……と改めて思ったよ。

「じゃあ、機嫌を損ねているわけではないんですね？」

「はい」

僕の言葉に、オースティン様がにこやかに微笑んだ。

どうやら、僕はオースティン様の手のひらで転がされていたらしい。

がっくりと項垂れると、アレンとエレナが慰めるように頭を撫でてくれたのだった。

◇ ◇ ◇

オースティン様と和解(?)した後の道中はとても平和だった。

しかし、別れの時間は来るもので……。

「本当にここでもいいのですか？ ルイビアの街まで送りますよ？」

「いいえ、ここで大丈夫です」

オースティン様達はこのまま王都まで帰るのだが、僕達はルイビアの街で待つレベッカさんに会

いに行く約束がある。

レベッカさんは、僕と子供達がとてもお世話になってるルーウェン家の当主の奥さんで、とても穏やかな淑女だ。子供達なんて、おばあ様として慕っているんだよね。

今は息子のグランヴェリオさんの奥さん、アルメリアさんのお産のために、二人と一緒に王都から領地であるルイビアの街に戻っているの、僕達はそこを訪れる約束をしているのだ。

そのことを知っているオースティン様はそこまで送ると言ってくれたのだが、僕はその申し出を断り、ガディア国に入ったところで降りしてもらった。

「道中であつた出来事もお土産話にすると約束していますので」

「そうですか、わかりました。では、会える日を楽しみにしていますので、また王都にも遊びに来てくださいね」

「はい、必ず。では、オースティン様、残りの道中もお気をつけてください」

「ばいばい」

飛び立った飛竜達の姿が小さくなるまで見送ったところで、僕は契約獣のジュール達を呼び出した。

《《わーい♪》》

「うわっ！」

すると、呼び出した途端、大きいサイズのフェンリルのジュールと、小さいサイズのスカーレッ

トキングレオのベクトルが飛びついてきたので、僕は後ろに転倒してしまふ。

「アレンも！」

「エレナも！」

「うお!!」

しかも、アレンとエレナが続いて、僕の上にいるジュールに飛び乗ってくる。

《《あらあら、兄様ったら大人気ね♪》》

《《兄上、大丈夫ですか？》》

《《タクミ兄、潰れちゃってるの!》》

飛天虎のフィート、サンダーホークのボルト、フォレストラットのマイルは、突然の出来事に目を丸くしている。

「ちよ、ちよっと、眺めてないで助けてくれ！」

《《ふふっ、わかったわ。——ほらほら、アレンちゃん、エレナちゃん、兄様が苦しがつているから降りましようね》》

僕が助けを求めると、フィートがアレンとエレナの襟首を啞えて、僕の上から降りしてくれる。

《《ジュールとベクトルもさっさと降りるの!》》

マイルがジュールとベクトルの頭の上に乗ってびよんびよんと跳ね、二匹を叱る。

《《兄上、お怪我はありませんか？》》

やっと上半身を起こせるようになって、ボルトが飛んできて僕のお腹の上に止まり、心配そうに見上げてきた。

「ああ、大丈夫だよ。あー、びっくりした」

《すみません》

「ん？ ボルトが謝る必要はないだろう？ それに、ちょっと大袈裟なじゃれつきであって、悪さをしたわけじゃないんだしさ」

さも自分が悪いことをしてしまったような表情をするボルトを、気にするなど撫でる。ボルトは契約獣の中では一番気遣い屋だな。

「それにしても……今回は随分と激しい歓迎だったな」

《何となく！ オレはジュールに続いた！》

ベクトルはよく考えずに行動したらしい。ということ、みんなの視線がジュールに集まる。

《だってー、お兄ちゃんから飛竜とグリフォンの臭いがしたんだもーん》

「……ああ」

ジュールの言い分は、もの凄く身に覚えがあった。

《そういえば、染みついているわね》

《そうなんですか？》

《全然わからないの！》

僕が立ち上がると、ジュールが臭いを上書きするみたいに身体を擦りつけて来て、フィートが確認するように臭いを嗅ぐ。

ここまで飛竜に乗って来たし、城を出発する時にグリフォンにもじゃれつかれたから、その時に臭いが移ったのだろう。

《お兄ちゃん、浮気？》

「……浮気ってなんだよ」

《だって、ボク達以外の魔物と戯れてきたんでしょ？ ボク達というものがありながら……酷いよ！》

えっと……これは嫉妬の類だろうか？

ジュールは頭で僕のおなかをぐいぐい押してくる。

「あのねー」

どうフオローしようかと考えていると、アレンとエレナが口を開く。

「かぞくがねー」

「ふえるんだよー」

《《《《《《《《《《《《》》》》》》》》》》》

子供達の言葉に、ジュール達は揃って首を傾げる。

「あ……ただそういう可能性があるって話だけだから、気にしないで」

「「ふえるもんー！」

「……」

《え？ え？ 家族？ それって、もしかして飛竜とグリフォン!?》

「うんー！」

僕の知らない間に、アレンとエレナの中では飛竜とグリフォンが家族になることが確定事項になってしまっていた。

「もー、だからまだ決まっていなくて。それに、飛竜とグリフォンもまだ生まれていないだろう」

《お兄ちゃん、もうちょっと詳しく!》

《そうね。兄様、私も聞きたいわ》

ジュールとフィートがもつと説明して欲しいと言い、ボルト、ベクトル、マイルも気になるようで、同意するように頷いている。

「えっと……クレタ国の城でグリフォンに懐かれたんだが、そいつが自分の卵を持って行けと渡してきたんだよ」

《《《うん、うん。それで?》》》

とりあえず、簡単に説明し始めてみたが、ジュール達は余計に興味を湧いたようだ。

「さすがに腕に抱えるほどの大きさの卵を持ち歩くと狙われる心配があるから断つたんだ。そうし

たら、今度は生まれたら連れて行けってさ」

《《《ほお〜》》》

《じゃあ、アレンとエレナの言う通り、もう少ししたら家族が増えるんだね！ ボク、弟がいい！あ、でも、妹でも可愛がる!》

僕の説明にジュールが目を輝かせる。いや、ジュールだけじゃなく、みんなだな。

「いや、だから、それはまだ決まっていなくて。生まれる子供の意思に任せることにしたから、家族になるかどうかはまだ不明だよ」

《あら？ 兄様、今の話だとグリフォンだけよね？ 飛竜はどなの?》

「飛竜もグリフォンと張り合って、子供を連れて行けって……言い出したんだよ」

《どんな子なのか楽しみなの!》

「だから……いや、もういいか」

ここまでくると「まだ決まっていない」と突っ込むのも無粋そうなので、止めておく。

「ほらほら、そろそろ出発するぞ。じゃないと、少しも移動しないうちに暗くなるからな」

だが、増えるかもしれない家族について楽しそうに語り合う子供達に早めにストップをかけておいた。

あまりこの話で盛り上がりながらも対応に困ってしまうし、本当にこのままでは日が暮れてしまいそうな気がしたからな。

まあ、ここで日が暮れても問題ないといえれば問題ないが、せめてもつと野営に適した場所に移動はしたい。

《そうか、それもそうだよな。で、お兄ちゃん、どこに向かうの？》

「最終的にはルイビアの街。えっと、南東の方向だな」

《寄り道はしていいんだよな？》

「もちろん」

ジュールとフィートが本気を出せば、僕達を乗せていても、ルイビアの街には一日もかからずに到着するだろう。なので、寄り道は歓迎だ。

あ、でも、クレタ国に滞在した分、ルイビアの街に行くのが予定より遅れているので、あまり遅くならないようにはしたい。だいたい四、五日くらいを目安に向かいたいかな。

「とりあえず、あそこに見える森にでも行かないか？」

「「ぐへー」」

《《《《賛成！》》》》》

そこからの行動は早かった。

早く早くと子供達に急かされて、あつという間に森へとやって来た。

「あつ！ イーチー！」

森に入っただけで、アレンとエレナがイーチの実……イチゴに似た果実を見つけた。

《お、いっぱい生なっているね》

《あら、こつちにはブルーベリーもあるわ》

《ブラックベリーも混ざっていますね。おや、レッドベリーもありますよ》

《本当だ！ 美味しそうだね！ 兄ちゃん、食べていい？》

《も、ベクトル、食べるより集めるのが先なの！》

適当に入ってみた森だったけど、いろんな果実がたっぷりと生っているみたいだ。

ブルーベリーはこつちでは初めて見たな。見た目は……地球のものとはほとんど変わらないな。しかも、通常の青紫色以外にも黒と赤の実がある。甘みと風味が違うんだっけ。

「しかし、ここまで食べ頃なものが多いのも珍しいな。虫食いたいなものもないし……」

《確かにそうね。自然に落ちたつぼいもの以外がないのよね？》

僕の言葉にフィートが頷く。

どこにだって果実を食べる動物や虫、魔物がいるのだから、ここまで被害がないのも珍しい。

「偶然かな？」

《じゃあ、果実を食べない肉食系の生きものが多いのかしら？》

《おお！ じゃあ、オレ、倒してくる！》

僕とフィートが、果実が被害にあっていない理由を予想していると、ベクトルが尻尾をぶんぶん振り回しながら走って行ってしまった。

《行っちゃったの》

マイルが呆れたような声を出す。

「ははは。まあ、ベクトルは自由にさせておこう。で、僕は果実を採っていいよか」

《そうね。マイル、私達もベリーを摘みましよう》

《はいなの！》

とはいっても、アレンとエレナは既にジュールを伴ってイチの実を夢中で摘んでいるし、ボルトも器用にブルーベリーを集めている。

そんなみんなを見ながら、僕も採取を始めるのだった。

しばらくの間、イチの実、ブルーベリー、ブラックベリー、レッドベリーをたつぷりと収穫したので、僕は休憩を取ることにした。

「いっばいとれたねー」

《うん！ これでイチジャムとかイチミルクをいっばい作ってもらえるね》

ジュールの言葉に、アレンとエレナが目輝をさせる。

「アイスも！」

「プリンも！」

《こっちのベリーもいっばい摘んだわよ》

《ブルーベリーを使ったミルクもいいんじゃないですかね？》

《美味しそうな！》

フィート、ボルト、マイルも嬉しそうだ。

そうだな、休憩には飲みものも必須だ。

「今日はまだ飲んだことのないブルーベリーミルクにしてみるか？」

「《《《《うん！》》》》」

ブルーベリーミルクを作ってみんなに渡し、僕はゆったりと寛ぐ。

「それにしても、ベクトルはどこまで行ったんだろな」

《近くにはいないよね？》

《そうね。魔物の気配もないから、魔物を探して遠くまで行っちゃったのかしら？》

《ぼく、飲み終わったら捜してきましょうか？》

《前にフィートに叱られたばかりなのに、反省してないの！》

ジュール、フィート、ボルト、マイルが口々にそう言う。

結局、ミルクを飲み終わってもベクトルは全然帰って来る気配がなかった。

「うーん、とりあえず、この森は安全そうだから、野営はここにしようか。それなら、もう少しベクトルを自由にさせても問題ないしな」

《じゃあ、暗くなるまでもうちよつと時間がありそうだし、ボク達も少しだけ探検しても大丈夫？》

「そうだな。この森は果実が豊富だから、もう少し探してみるか」

「さがすー！」

というわけで、再び森を探検してみると、他にも果実がたっぷりと生っているのが見つかった。

「いっばい！」

「本当にベリーが豊富な森だな」

イチの実、ブルーベリーの他にも、イエローベリーにラブベリー。それになんと、流星^{スターストリ}まで

あつたのだ！

流星^{スターストリ}はイチの実よりひと回り大きくて、色は黄色。うっすらと星の模様のある珍しい果実だ。

もちろん、美味しい！

「スターベリー！」

アレンとエレナなんて流星^{スターストリ}を見つけた時、凄く目を輝かせていたよ。

というわけで、生っているものはしっかりと収穫させてもらった。

《兄ちゃん！ 大変、大変！》

ベリー採りを終わらせて野営の準備を始めていると、ベクトルが慌てた様子で駆け込んできた。

「ベクトル、そんなに慌ててどうしたんだ？」

《た、大変だよ！》

いつもはどんなに走り回ってもけろっとしているベクトルが、珍しく息を切らしている。

「大変なのはわかったから。何が大変なんだ？」

《あのね！ あっちに入れない場所があるの！》

「入れない場所？」

《うん！ 奥に景色が見えるのに、行こうとしたら——ゴチンって！ 透明^{とうめい}な壁があるみたいなん

だよ！》

ベクトルが言うことに間違いがないのであれば、大変であるかはどうかさておき、不思議なこと

なのは確かだな。

「気にはなるな。けど、今から行くのは無理だな」

《何で!?》

《そうね。だって、もうじき日が暮れるものね》

すぐにでも確かめに行きたいが、これから暗くなるという時に不思議な場所に行くのは止めておきたい。

「ベクトル、そこは何か危険とか、悪い感じはしたか？」

《ん？ えっと……ううん、悪い感じは全然しなかったかな？》

「それなら急がなくても大丈夫だな。明るくなってから行くことにしよう」

僕の言葉に、アレンとエレナが首を傾げる。

《オレも好き！ これ、美味しい！》

《とっても美味しいの！》

大好評である。アレンとエリナに至っては、感想すら言う時間が惜しいとばかりに黙々と食べ進めている。

んー、でも、僕としては是非ともうどんが欲しいところだ。そういえば、まだ作ったことがなかったな。えっと……うどんは、小麦粉と塩と水だけだよな？ 今からでは無理だが、今度作ろう。

◇ ◇ ◇

食事も終わり、寝る支度をしていると前方から何か近づいてくる気配があった。

「……魔物ではないよな？」

《うん、これは人かな？》

——ガサリ、ガサリと、音が少しずつ近づいて来るので、僕達は少し警戒する。

「こんばんは」

「……こんばんは？」

やって来たのは年配の男性であった。

灰色のフードつきのローブを着ているため、見た目だけ言えば怪しき満点だが、何故か警戒心は

働かない。しかも、相手から普通に挨拶された。

「寝る支度をしているようだが、我が家へ来ないかい？ そんなに広くないので快適とは言えないが、少なくとも屋根の下で眠れるよ？」

「家？」

「すぐその結界の中さ。昼間、その赤い子が来ていたね」

ベクトルが見つけた透明な壁は、この人が張った結界だったらしい。そして、その中にはこの人の家があるようだ。

「えっと……何故、お招きしてくれるんですか？」

「少し観察していたが、なかなか興味深いことが多くてな。それに、少々聞きたいことができたのだよ」

「……」

どうやら僕達は観察されていたらしい。

しかし……どこが興味深かったのだろうか？ 子供達と果実を採取して、普通にご飯を食べていただけだよな？

「……グルッ」

「何だ？ クローディアも来たのかい？」

返事をしかねていると、お爺さんがきた方向から黒い豹——ブラックパンサーがゆったりと歩い

てきた。そして、お爺さんにすり寄っていく。

「その子はあなたの従魔ですか？」

「ああ、そうだよ。そういえば、自己紹介がまだだったね。私は、オズワルド。この森に住む隠居の爺さ。で、この子はクローディアだよ」

お爺さんが名乗りながらフードを取ると、白髪と長い耳が現れる。

……オズワルドさん？ えっと……ああ、聞き覚えがあると思ったが、ガディアの騎士に同じ名前の人がいたな。」

「あつ、おみみがながーい！」

失礼して【鑑定】させてもらうと、お爺さん——オズワルドさんはエルフということがわかった。なんと四百二十一歳！ 僕が出会った中で最年長だ！ あ、リヴァイアサンのカイザーは別でね！

そして、ブラックパンサーのクローディアだが、オズワルドさんは【闇魔法】スキルを持っていないので、契約獣ではないようだな。

魔物を使役するには二通りあって、一つは僕のように【闇魔法】の契約術を用いて従わせる方法。これは主従としての強制力が備わる契約なので、魔物のほうに従属する意思が必要だ。そして、契約すると必要に応じて影に控えさせたり召喚したりできるようになる。

もう一つは懐かせたり調教したりして従わせる方法。所謂、タイムというやつだな。極端な話、

従属させる魔道具の首輪を嵌めて強制的に従わせることも可能だ。

オズワルドさんはテイマーで、見た感じからしてクローディアは懐いて従っている従魔なのだろう。

「エルフと会うのは初めてかい？」

「そうですね」

見た目がエルフに先祖返りしただけの民族であるアンディさんとハーフエルフのカーナさんになら会ったことはあるけれど、純粋なエルフは初めてだ。えっと……確か、人族の寿命が八十歳前後なのに対して、エルフの寿命は五百歳前後だったはずだ。

「それで、どうだろう？ 招待は受けてくれるのかね？ あ、もちろん、君の従魔達も一緒に構わないよ。ただ、赤い子は昼間みたいに小さくなってくれないと入れないけれどね」

オズワルドさんは常に落ち着いた様子で紳士的だし、アレンとエレナはもちろん、ジュール達も警戒する様子はない。

「みんな、どうする？」

「んにゅっ？」

みんなにも意見を聞いてみたが、アレンとエレナはよくわからないのか首を傾げていた。

《いいんじゃないかな？》

《そうですね。アレンちゃんとエレナちゃんを屋根の下で寝かせられるのなら、そのほうがいいと思う

わ

《そうですね。ぼくもいいと思います》

《ええ、オレ、一緒に寝たい》

《ベクトルは小さくなって寝ればいいの！ わたしもいいの！》

ジュール達は順番に意見を言っていく。

結果は、賛成が四。反対が一。まあ、ベクトルも完全な反対というわけではなさそうだ。

「じゃあ、お願いします。あ、僕は冒険者のタクミと言います」

多数決の結果、オズワルドさんの家にお邪魔することになったので、改めて僕も名乗り、子供達のことも順番に紹介した。

「そうか、招待を受けてくれてありがとう。じゃあ、タクミさん、こっちだ。おいでなさい」

「はこ」

オズワルドさんの家に向かっていている途中、アレンとエレナは歩きながらとうとうと始めていた。

「おいで」

「……うにゅ」

僕が抱き上げると、二人は本格的に眠り始める。

「おやおや、すっかりお眠ねむのようだな。すまなかったね。もう少し早く迎えに行けば良かったのだ

が、君達がどんな人物なのか確認する必要はあったからな」

「まあ、どんな人物かわからない人間をほいほい自宅に招き入れるわけにはいきませんから、必要なことだと思いますよ。場所も場所ですしね」

こんな人里離れた森の中で人と出会ったら、僕だって相手がどんな人物なのか確認する。無警戒でほいほいと声を掛けたりしない。

「さあ、こっちだ」

オズワルドさんの案内で森を歩くと、薄い膜のようなものをくぐった感覚があった。

「ベクトルが言っていた結界の場所かな？」

《そう！ さっきは通れなかったとこだ！》

蒼海宮そうかいみやう——人魚族の集落に行った時に似たような経験したことがあるのですぐにわかった。

「……そういえば、この森はオズワルドさんが管理していたりしますか？」

この森は、自生している“では済まされなくらいたくさん”の果実で溢あふれていた。オズワルドさんに会う前はそういうこともあるんだな〜と思っていたが、結界の中に入って絶対に違ちがうと確信した。

だって、結界の中の木や茂みには、さっきまでいた所よりもさらに多くの果実が生っているじゃないか！

それで聞いてみたところ、オズワルドさんはあっさりと頷うなづいた。

「私というよりは植物に強い同居人が、暇ひまを持って余しているろやっているな」

「大変申し訳ありません！」

僕はオズワルドさんの返答を聞いて、すぐに謝罪した。

「ん？ 何に対しての謝罪かな？」

「僕達、森に生っていた果実を勝手に採ってしまいました」

「ああ、それなら気にしないでいい。ここは別に私の土地っていうわけじゃないし、私達だけでは食べきれないほど生っているからね。あとは自然に朽くちていくだけだから、それなら君達に美味しく食べてもらったほうが、うちの子も喜ぶさ」

オズワルドさんは少しも気を悪くした様子はなく、むしろもっと採れと言わんばかりだ。

《そうよ。遠慮せずにもっと食べてちょうだい》

「うわっ！」

そんな会話をしていると、背後に突然、緑色の髪の女性が現れ、僕は思わず驚きの声を上げてしまった。

《あら、驚かせちゃったかな？ 私はドライアドのマーシェリー。オズワルドの相棒よ》

ドライアドって樹の精霊だったよな？

少し透けていること以外は普通に見えるその女性から【念話】っぽい声が聞こえる。

「こちら、マーシェリー。子供達が寝ているんだから、驚かすのは止めなさい」

《あら、わざとではないわよ？》

「それはわかっているが、子供を相手にすることには慣れていないだろう？ なら、注意は必要だろっ」

《ふふっ、それもそうね》

クローディアもそうだったが、マーシェリーさんもオズワルドさんのことを慕したっている様子がしつかりと窺うかがえた。

《オズ、奥の部屋、使えるようにしておいたわよ》

「ありがとう、マーシェリー。——じゃあ、タクミさん、こっちの部屋を使ってくれ」

結界を通り抜けるとすぐにオズワルドさんの家が見え、そのまま中に入って部屋まで案内される。

「ありがとうございます。二人を寝かせたら、少しお話できますか？」

「私は構わないが、明日になってからでもいいのだよ？」

「オズワルドさんの聞きたいことというのにも気になりますから」

「ああ、それもそうだね。じゃあ、お茶を用意して待っているから、子供達を寝かせたら居間に来てくれ」

「はい、ありがとうございます」

オズワルドさんが居間のほうに向かうのを見送ってから僕は部屋へ入り、アレンとエレナをベッドに寝かせる。

立ち読みサンプル はここまで

「じゃあ、ベクトルとジュールは二人についていてくれ」

《うん、わかった》

《まかせてー》

添い寝すると宣言していたベクトルは、小さい姿でいそいそと子供達の枕まくらになっているし、ジュールも既に小さい姿でアレンとエレナの間まに収まっている。そんなわけで、僕が離れている間まのことは任せることにした。

《タクミ兄、わたしもここに残って二人が静かにしているように見張るの！》

《じゃあ、私とボルトは兄様のほうね》

《そうですね》

マイルも部屋に残ることになり、小さい姿のフィートとボルトが、僕と一緒にオズワルドさんが待つ居間に行くことになった。

「早かったね」

居間に入ると、とても良いハーブの匂においがした。

「ハーブティーを用意してもらったんだが、苦手だったら遠慮えんりよなく言ってくれ。違うものを用意するから」

「大丈夫です。ありがとうございます」

僕はひと口お茶を飲んでから、率直にオズワルドさんに用件を尋ねる。

「早速ですが、オズワルドさんの用件は何でしょうか？ 結界を張って森に住んでいるぐらいですから、あまり人との接触がお好きではないのでしょうか？」

あえて街や村から離れた森の中で従魔と住んでいるのだ、あまり人付き合いが好きでないことは容易に想像できる。

オズワルドさんは、そんな僕の質問にあっさりと頷いた。

「タクミさんの思っている通り、私は人との付き合いを煩わづらわしく思っている。最初は姿を現す気はなく、君達が立ち去るのを静かに待つつもりだったよ」

想像は合っていたようだ。

「だが、タクミさんがなかなか良い従魔を従えていたからね、まずそこに興味を持った」

《あら、私達？》

フィートが声を出す、オズワルドさんとマーシェリーさんには聞こえないらしい。

じゃあ、マーシェリーさんは【念話】じゃなくて、喋しゃべっていたのかな？ それとも【念話】スキルの熟練度が上がれば、不特定多数の人にも聞こえるようになるのかな？

とりあえず、腕の中のフィートを撫でておく。

「まあ、それだけでは会う気にはならなかったのだが、君が見たこともない料理を作っていて、さらに興味が湧いた」

「……料理ですか？」